

ある住宅の移築

白井原多



移築前外観



移築前内観



内部土壁を掻き落した状態



再利用する為掻き落した上塗土壁



解体時の軒裏の様子

ある住宅とは一九五三（昭和二十八）年、東京都世田谷区の上野毛に建てられた平屋の小さな木造住宅（施主渡部均・リツ夫妻、設計白井晟一）。「試作小住宅」との名称で発表された。この住宅は東京で学ぶ子息の拠点として建てられ、その後も親類縁者が住み継いできた。

『新建築』誌（一九五三年八月号）に祖父・白井晟一がこの住宅について次のような文を記している（一部抜粋）。

「住居は一生の間には度々つくれない。長くもない生涯を、強い風や雨に、或いは地震に堪え、見るからにがっしりとした家で暮らしたいとは誰しも思うことではないかと考える。ロウコオスト（ローコスト）は建築のエレメントである。しかし、人間の生活や精神を引き上げられるロウコオストでなければならない。かつての日本民家には斯ういう形式が多かった。白い漆喰壁とくすんだ木部との階調は、新舊を超えて素朴な故郷の感覚であると思う。此の『システム』は構造的にも、意匠的にも充分近代建築のはげしい陶冶の対象となり得ると考えられる」

わたしが初めてこの住宅に足を踏み入れたのは二〇〇四（平成十六）年十二月、竣工から五十年以上が経過していた。

多くの方が住み継いできたこの建物は、建設当時の状況そのままのような印象を受けるほど良好な保存状態で、施主の建物に対する強い愛情と、建築当初の雰囲気損なうような安易な改修は行わないというポリシーのもとに維持管理されてきたことがわたしにも伝わってきた。

この建物を渡部家では「学舎」と呼び慣わしてきた。

一九七七（昭和五十二）年に均氏、二〇〇四年にリツ氏が故人となられた。名義人であったリツ氏が「上野毛の土地は売却して処理してもらいたいが、できることなら建物を壊さず、大切にそのまま住んでくれる人に譲ってほしい」という趣旨のメモを遺されていたことから、遺族側は建物の保存を条件に土地の買い手を探した。

しかし、条件の合う売却先はなかなか見つからず、解体もやむを得ないという結論に落ち着きつつあった〇六年六月、夫妻の長男である渡部三喜氏（この建物の最初の住人で、現在、湯沢市で病院長。以下渡部先生）は、いよいよこれで見納めかという思いで一人上野毛を訪れ一夕を過ごされた。

氏は一晩、これまでのことを思い起こす中で、ご自身も高校時代を含め五年を過ごしたこの家を葬るのは忍び難いとの思いに駆られ、湯沢への移築を決断されたのであった。移築について相談をいただいたのは、それから間もなくのことである。

わたしが生まれ育った「アトリエNo. 5」が、試作小住宅と同時期の一九五二（昭和二十七年）年に祖父が設計した木造住宅だったこと、そして建物の雰囲気やディテールに共通点があったことなどから「身近に感じるこの建物の移築をなんとしても完遂させたい」という強い思いに駆られ協力させて頂くこととなった。まず最初に取りかかったのは、どんな方針で解体するかという検討である。

解体の過程でどうしても取り外せないもの、傷みがはげしいものなどが出てくる可能性がある。しかし、傷んでいるから捨ててしまうというわけにはいかない。断片を保存しておけば移築時、新しい部材を造る際の参考になるのである。



軸組みだけになった外観



番付された部材



13.5tトラックに積込まれる部材



湯沢で再建される軸組み



湯沢での移築工事が進む



移築後外観

このような方針を、この計画にかかわる職人の方々や、クライアントの渡部先生が把握し、意思統一を図ることが最初に行うべきことと考えた。

まず各部材を種別ごとに整理し、保存の優先順位を把握するための渡部邸（試作小住宅）移築に関する部材の再利用についてという表を作成、関係者に移築の全体像を把握して頂いた。そして構造材、造作材、建具などの保存はもちろん、壁の下地となる木摺、土壁の上塗りなどは移築時に使用できるかどうかは別にして、可能な限り丁寧に取り外して保存することとし、移築時に新規のものに取り替えざるを得ないもの、現地で再現するものと判断したのは、傷みがあり再使用が困難であろう屋根などの板金材、その下地のルーフィング材および、基礎コンクリート、犬走り・ポーチのコンクリートの類とすることなどをこの表で確認した。

破棄するものは実測を行い、板金材などの素材はサンプルとして収集し、仕様の把握を行うことにした。この表を解体前、解体後、移築前と状況を確認しながら更新していった。「オリジナルをできる限り大切に引き継ぐ」という方針のもと解体保存工事を行うことが決まった。

解体保存工事は寺社や文化財の修理なども手がける風基建設（東京）が担当することが決まり、調査・実測の後、二〇〇六年八月に解体保存工事がスタートした。

保存解体で重要なのは部材の番付けだ。平面の通り芯（組立基準線）、X軸・Y軸に「い」「ろ」「は」「や」「一」「二」「三」などを設定。柱であれば「い一柱」、梁であれば「一通り い～ほ梁」と設定、木片に書き込んだものを部材に張り付けた。また、床材であれば部屋名・東側から何枚目という意味で「勉強室 東一」などと記入。こうした手法により、あらゆる部材の整理が可能となった。解体は想定の一カ月で終了し、部材は一三・五トントラック一台で湯沢に移送した。

移築する敷地は上野毛と比べるとかなりゆったりとしていたが、防火的な規制から外部に木部を露出させることに制限があった。つまり、隣地境界などから建物の距離を基準以上保たないとこの建物の特徴の一つでもある木部が露出した軒裏を実現できなくなるのだ。幸いにも、敷地の広さが充分であることにより隣地境界線から建物までの距離を基準以上に保つことができた。逆を言えば現行法規では、ゆとりのない同じような法規制がかかる敷地では、オリジナルの意匠を保つことは難しかったということになる。

新敷地での建物の配置方法や水廻りの増築方法について検討をしながら、湯沢に運び込まれた部材一つ一つの利用方法を確認した。改めて五十年の歴史が刻まれた部材は高価・安価に関係なく、一つ一つ大切にしたいと考えたとともに、併せて別な視点から耐久性に欠ける部材は、建物にさらなる命を吹き込むべく、サンプルとして取り外した部材を参考の上、新しい部材に替えることにした。既存の部材で新しいものに変更することにしたのは、水廻りおよび玄関前の土台、屋根廻りの野地板、垂木など。野地板などは壁下地材として再利用することにし、着工は〇七年四月と決まった。

湯沢での工事は普段から渡部家に入出入りする職人の方々の手になねられた。解体時の実測データを書き込んだ図面やスケッチ、新たな増築部の図面、解体時に撮った膨大な量の写真、そして番付けされた部材を棟梁が把握し、部材を整理の上着々と進んでいった。中でも軸組・造作工事は、解体と移築が別の手で行われたにもかかわらず、緻密な部材整理と棟梁の理解力があいまってスムーズに進んでいった。

移築に際して最も気を配ったのが東京と秋田の気象の違い、特に積雪への対処である。軒が一・二尺程度と深く、また屋根を軽快にみせるために軒先を薄く見せるデザイン操作をしており、豪雪地では軒部分に不安があった。部材のサイズを大きくすればクリアできるが、それでは意匠が変わってしまう。そこで軒先には屋根の板金材の下に薄いシート状の発熱体を敷き込み、融雪させることによって軒の負担を軽減し、部材を従来のサイズとすることとした。



移築後内観

内部の土壁塗りは解体時に掻き落としたものと特殊陶土色土、砂、ワラ、スサなどを混合させ、上野毛での風合いを再現することにした。しかし、現場で試し塗りをすると、かなり明るい印象。上野毛のくすんだ渋さは出なかった。砂は湯沢で調達したのだが、よく見ると骨材の砂が白っぽい。上野毛で使われていたのはどちらかというと黒っぽい砂。調べた結果、上野毛のものは関東の利根川あたりの砂ということで急遽、利根川の砂を使い、その風合いを再現した。

〇七年十月、造園外構工事を残して移築が無事完了。湯沢の試作小住宅には「顧空庵」という名前が新たにつけられた。

建物が後世に残るためにはいくつかの条件があると思う。建物自体の耐久性、その建物にとって相応しい環境、建物に対する愛着、家族のつながり（親と子の絆）、施主と設計者・施工者の思いの共有、そして経済的要因。これらの一つでも欠けるとその存在は危ういものとなる。使い捨ての思想が蔓延し、建築の世界においても木造住宅の多くが長くない命を終える中、今回の移築は施主の子の代に別の地で新たな命を吹き込まれた稀な例といえよう。

当たり前のように身近にあったものがなくなった時、その重要性に初めて気づくことがある。だが、なくなってしまうばもう取り戻すことはできない。身近にある時を経て存在してきたものにあらためて目を向け、大切に思う心が世の中を成熟させてゆくのではないかという気がしてならない。

渡部先生との交流の中で、建物への深い愛情とものを大切に作る心が伝承されていくさまと、物事を決断し実行させる気概に触れることができ、また、わたし自身も祖父の作品に深くかかわれたことにより、今後目指すべきものを立ち止まって考える貴重な経験を得ることができた。多くの人と出会い、ひとつの目的を共有できたこと、そして多くの人たちの熱い思いと利害を超えた協力に感謝したい。

秋田魁新報の2009年2月2日・4日原稿